

有明海及び八代海に係る大学等による調査研究に関する文献シート

| | | | | |
|-------|-----------------------|------------|------|------------------------------|
| No. | 444 | -230 総論 | タイトル | 潮止め後の諫早湾と有明海 -事業の見直しを求めて- |
| 著者 | 東幹夫(長崎大学教育学部) | | | |
| キーワード | 定点調査,底生生物,流速減少,堆積環境変化 | | | |
| 出典 | 汽水湖 第13号, pp.37-46 | 発行年 | 2001 | |

<目的>

諫早湾干拓後、3年半の間に諫早湾や有明海において起こった変化について概観した。

<結果>

調整池内の塩分濃度についてみると、潮止め前 29.3‰、1ヶ月後 10‰前後、4ヶ月後 5‰弱、1年4ヶ月後には 0.1～1.3‰まで低下し、底層水を含む全域で淡水化が急速に進んだが、堤防からの漏水等のため淡水化は完了していない。その一方で富栄養化の進行が著しく、COD、T-N、T-Pとも環境基準値の2倍近くの値に達したままで推移している。

諫早湾口周辺から有明海奥海域において、1997年に対する2000年の全底生動物の平均生息密度は32%であった。2000年は1997年より7割弱の減少でその差は95%レベルで有意であった。ヨコエビ類は17.7%、二枚貝類は23.7%でいずれも90%レベルで有意、線虫類・クモヒトデ類・巻貝類などでは95%レベルで有意な密度低下が認められた(図1)。

筑後大堰や流入諸河川の河口堰や河川改修、熊本新港、海底地盤沈下などに加え諫

早湾干拓、湾口の海底掘削は有明海の影響(有明海異変)の引き金となり、さらに追い討ちとなって有明海の生態系に巨大なインパクトを追加したと考えられる。

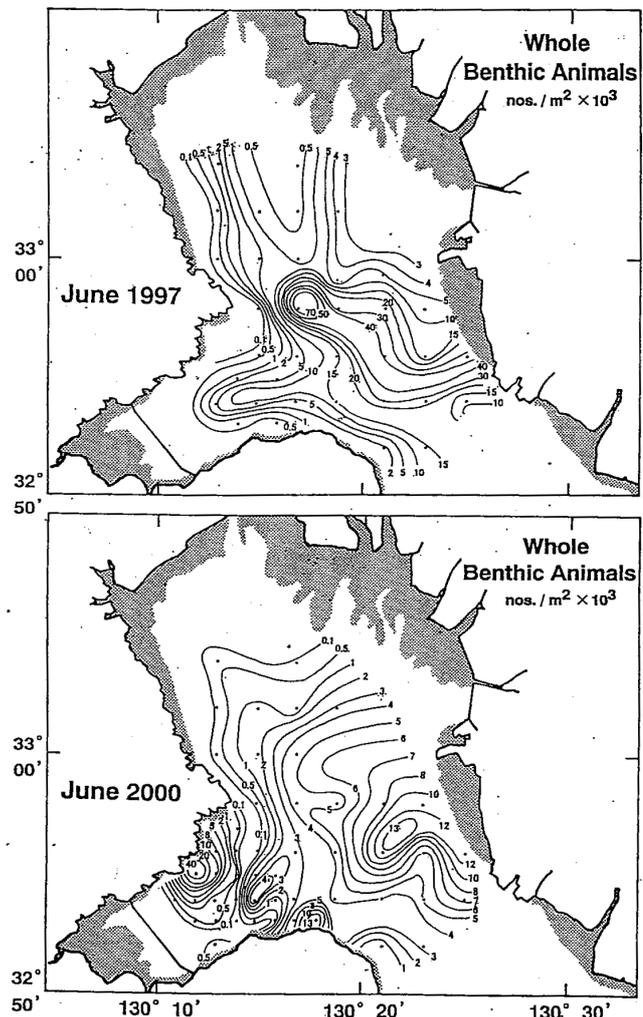


図1 諫早湾口周辺から有明海奥海域における1mm以上の全底生動物密度等値線(数字を1,000倍すれば1㎡あたり個体数となる)の1997年6月と2000年6月の比較(網かけ部分は干潟)。